シンガポールに インド芸能を広めた男

偶然の出会いにより、その後の人生が決まってしまうこともある。オーストラリアへ渡ろうとしていたインド人舞踊家は、その途上のシンガポールの地で、インド芸能の振興と伝承に、生涯をささげた。

竹村嘉晃（たけむら よしあき）
現代インド地域研究国立民族学博物館拠点 拠点研究員

セイロン・タミル協会でインド舞踊を教えるバスカー（1954年、シンガポール）
© Bhaskar's Arts Academy

二〇一三年四月、インド系シンガポール人の男性舞踊家K・P・バスカーが八七歳の生涯を終えた。彼の訃報は、シンガポールで発行されているインド系のタミル語新聞はもとより、国内最大の日刊英字紙ザ・ストレイツ・タイムズや中国系の新聞でも報じられ、彼の逝去を惜しむ声とともに、インド古典舞踊のパイオニアとして彼の功績を称（たた）えることばが綴（つづ）られていた。インド系というマイノリティとして生きた彼の人生は、シンガポールにおけるインド芸能の発展と深くかかわっている。

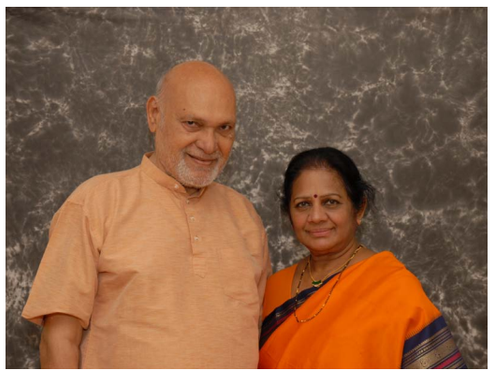
偶然に立ち寄った場所

バスカーのライフヒストリーは、近代インドにおける芸能者の社会的流動性を考えるうえで示唆に富んでいる。一九二五年、インド・ケーララ州南部の高カーストの家系に生まれた彼は、幼少より音楽や舞踊に興味を抱き、地元の芸能に慣れ親しんでいた。青年期になると、大学進学を望む家族を押し切って、トラヴァンコール王宮が運営する舞踊学校に入学し、そこで古典舞踊のカタカリやオッタン・トゥッラルなどの芸能を習得する。卒業後は、植民地行政官らが集うバンガローの社交界の場でボールルームダンスの踊り手として活躍したり、マドラスの映画スタジオでウダイ・シャンカル（シタール奏者のラヴィ・シャンカルの兄）主演の映画『カルパナ』（一九四七年）にダンサーとして出演したり、スタジオ付きの振付師としてダンス・シーンの演出を手がけたりしていた。

そんななか、左翼勢力が台頭していた戦前のセイロン（現スリランカ）で、英印軍の慰安公演に出演した際に出会ったオーストラリアの共産党一団からの誘いをうけ、一九五二年、彼は新天地を求めてオーストラリア行の船に乗り込んだ。その航海途中にたまたま寄港したのが、その後の生涯の住処（すみか）となるシンガポールであった。

「文化の砂漠」から「芸術のグローバル都市」へ

シンガポールはいわずと知れた多民族、多文化社会の国である。人口は、七割以上を占める中国系の他に、マレー系やインド系によって構成され、人びとは異なる言語、宗教、生活習慣をもって暮らしている。天然資源のない狭小な国土と限られた人的資源という制約のなかで、マレーシアから独立したシンガポールは、経済発展を国是とした開発政策を推進し、現在では国民一人あたりのGDPが世界のトップ一〇に入るほど豊かな国に発展した。その一方で、独自の文化形成の余地がなく、「文化の砂漠」といわれ続けてきたこの国は、経済発展を遂げた一九九〇年代以降から「創造都市」を標榜（ひょうぼう）し、芸術文化に重点を置く政策も進めるようになった。


晩年のK.P.バスカーと妻のサンタ・バスカー（2001年、シンガポール）
© Bhaskar's Arts Academy

インド芸能の伝承

バスカーがシンガポールに降り立った当初、インド系移民は人口の約一割を占めていたが、インド芸能を教授する機関はひとつもなかった。当てにしていたオーストラリアの共産党一団からの音信が途絶えたことと知人らの説得が契機となり、彼はシンガポールでインド芸能を教えることを決心し、一九五三年にバスカーズ・アカデミーを設立した。以来、彼は亡くなるまでの日々をインド系移民だけでなく、多くの人びとにインドの音楽・舞踊文化を伝えることに力を注いだ。また、一九八八年に組織された文化芸術諮問会議には主要メンバーとして加わり、中国系、マレー系、インド系のコミュニティに伝わる伝統的な芸術文化の発展に対して、国が積極的に支援するよう意見陳述した。それは、教育・資金・インフラの点において、今日の芸術文化政策の核となるものでもあった。インド出身の名もなき踊り手は、偶然に立ち寄ったシンガポールという地で、インドの音楽・舞踊文化の普及に大きな功績を残したのである。

バスカーが他界した二年後の二〇一五年四月、シンガポールのインド人街にはインディアン・ヘリテイジ・センターがオープンした。同センターは、インド系移民の歴史や文化を展示するとともに、インド芸能の調査研究と伝承や発展に力を注ぐことを掲げている。六〇年にわたってインド芸能の普及に奮闘したバスカーの意思は、次世代に、そしてシンガポールの国にしっかりと継承されている。

シヴァ神のポーズをとるバスカー（1951年、セイロン）© Bhaskar's Arts Academy